

# 辛夷の花

堀辰雄

青空文庫



「春の奈良へいつて、馬酔木あしびの花ざかりを見ようとおもつて、途中、木曾路をまはつてきたら、おもひがけず吹雪に遭ひました。

……」

僕は木曾の宿屋で貰つた絵はがきにそんなことを書きながら、汽車の窓から猛烈に雪のふつてゐる木曾の谷々へたえず目をやつてゐた。

春のなかばだといふのに、これはまたひどい荒れやうだ。その寒いつたらない。おまけに、車内には僕たちの外には、一しよに木曾からのりこんだ、どこか湯治にでも出かけるところらしい、商人風の夫婦づれと、もうひとり厚ぼつたい冬外套をきた男の客

があるつきり。——でも、あげまつ上松を過ぎる頃から、急に雪のいき

ほひが衰へだし、どうかするとぱあつと薄日のやうなものが車内にもさしこんでくるやうになつた。どうせ、こんなばかばかしい寒さは此処いらだけと我慢してゐたが、みんな、その日ざしを慕ふやうに、向うがはの座席に変はつた。妻もとうとう読みさしの本だけでもつてそちら側に移つていつた。僕だけ、まだときどき思ひ出したやうに雪が紛々と散つてゐる木曾の谷や川へたえず目をやりながら、こちらの窓ぎはに強情にがんばつてゐた。……

どうも、こんどの旅は最初から天候の具合が奇妙だ。悪いといつてしまへばそれまでだが、いいとおもへば本当に具合よくいつてゐる。第一、きのふ東京を立つてきたときからして、かなり強

い吹きぶりだつた。だが、朝のうちにこれほど強く降つてしまへば、ゆふがた木曾に着くまでにはとおもつてゐると、午すこしまへから急に小ぶりになつて、まだ雪のある甲斐かひの山々がそんな雨の中から見えだしたときは、何んともいへずすがしかつた。さうして信濃境しなのぎわみにさしかかる頃には、おあつらへむきに雨もすつかり上がり、富士見あたりの一帯の枯原も、雨後のせゐか、何かいきいきと蘇つたやうな色さへ帯びて車窓を過ぎた。そのうちにこんどは、彼方に、木曾のまつしろな山々がくつきりと見え出してきた。……

その晩、その木曾福島ふくしまの宿に泊つて、明けがた目をさまして見ると、おもひがけない吹雪だつた。

「とんだものがふり出しました……」宿の女中が火を運んできながら、気の毒さうにいふのだつた。「このごろ、どうも癖になつてしまつて困ります。」

だが、雪はいつかう苦にならない。で、けさもけさで、そんな雪の中を衝いて、僕たちは宿を立つてきたのである。……

いま、僕たちの乗つた汽車の走つてゐる、この木曾の谷の向うには、すっかり春めいた、明かるい空がひろがつてゐるか、それとも、うつたうしいやうな雨空か、僕はときどきそれが気になりでもするやうに、窓に顔をくつつけるやうにしながら、谷の上方を見あげてみたが、山々にさへぎられた狭い空ぢゆう、どこからともなく飛んできてはさかんに舞ひ狂つてゐる無数の雪のほか

はなんにも見えない。そんな雪の狂舞のなかを、さつきからときをり出しぬけにはあつと薄日がさして来だしてゐるのである。それだけでは、いかにもたよりなげな日ざしの具合だが、ことによるとこの雪国のそとに出たら、うららかな春の空がそこに待ちかまへてゐさうなあんばいにも見える。……

僕のすぐ隣りの席にゐるのは、このへんのものらしい中年の夫婦づれで、問屋の主人かなんぞらしい男が何か小声でいふと、首に白いものを巻いた病身らしい女もおなじ位の小声で相槌を打つてゐる。べつに僕たちに気がねをしてそんな話し方をしてゐるやうな様子でもない。それはちつともこちらの気にならない。ただ、どうも気になるのは、一番向うの席にいろんな恰好をしながら寝

そべつてゐた冬外套の男が、ときどきおもひ出したやうに起き上つては、床のうへでひとしきり足を踏み鳴らす癖のあることだつた。それがはじまると、その隣りの席で向うむきになつて自分の外套で脚をつつみながら本をよんでゐた妻が僕のはうをふり向いては、ちよつと顔をしかめて見せた。

そんなふうで、三つ四つ小さな駅を過ぎる間、僕はあひかはらず一人だけ、木曾川に沿つた窓ぎはを離れずにゐたが、そのうちだんだんそんな雪もあるかないか位にしかちらつかなくなり出てきたのを、なんだか残り惜しさうに見やつてゐた。もう木曾路ともお別れだ。気まぐれな雪よ、旅びとの去つたあとも、もうすこし木曾の山々にふつてをれ。もうすこしの間でいい、旅びとが

おまへの雪のふつてゐる姿をどこか平原の一角から振りかへつて  
しみじみと見入ることができるとまで。――

そんな考へに自分がうつけたやうになつてゐるときだつた。ひ  
よいとしたはずみで、僕は隣りの夫婦づれの低い話声を耳に挿さ  
んだ。

「いま、向うの山に白い花がさいてゐたぞ。なんの花けえ？」

「あれは辛夷こいぶしの花だぞ。」

僕はそれを聞くと、いそいで振りかへつて、身体をのり出すや  
うにしながらか、そちらがはの山の端にその辛夷の白い花らしいも  
のを見つけようとした。いまその夫婦たちの見た、それとおなじ  
ものでなくとも、そこいらの山には他にも辛夷の花さいた木が見

られはすまいかとおもつたのである。だが、それまで一人でぼんやりと自分の窓にもたれてゐた僕が急にそんな風にきよときよとそこいらを見まはし出したので、隣りの夫婦のはうでも何事かといったやうな顔つきで僕のはうを見はじめた。僕はどうもてれくさくなつて、それをしほに、ちやうど僕と筋向ひになつた座席であひかはらず熱心に本を読みつつけてゐる妻のはうへ立つてゆきながら、「せつかく旅に出てきたのに本ばかり読んでゐる奴もないもんだ。たまには山の景色でも見ろよ。……」さう言ひながら、向ひあひに腰かけて、そちらがはの窓のそとへちつと目をそそぎ出した。

「だつて、わたしなぞは、旅先きでもなければ本もゆつくり読

めないんですもの。」妻はいかにも不満さうな顔をして僕のはうを見た。

「ふん、さうかな」ほんたうを云ふと、僕はそんなことには何も苦情をいふつもりはなかつた。ただほんのちよつとだけでもいい、さういふ妻の注意を窓のそとに向けさせて、自分と一しよになつて、そこいらの山の端にまつしろな花を簇がらせてある辛夷の木を一二本見つけて、旅のあはれを味つてみたかつたのである。

そこで、僕はさういふ妻の返事には一向にとりあはずに、ただ、すこし声を低くして言つた。

「むかうの山に辛夷の花がさいてゐるとき。ちよつと見たいものだね。」

「あら、あれをござらんにならなかつたの。」妻はいかにもうれしくつてしやうがないやうに僕の顔を見つめた。

「あんなにいくつも咲いてゐたのに。……」

「嘘をいへ。」こんどは僕がいかに不平さうな顔をした。

「わたしなんぞは、いくら本を読んでゐたつて、いま、どんな景色で、どんな花がさいてゐるかぐらゐはちやんと知つてゐてよ。

……」

「何、まぐれあたりに見えたのさ。僕はずつと木曾川の方ばかり見てゐたんだもの。川の方には……」

「ほら、あそこに一本。」妻が急に僕をさへぎつて山のはうを指した。

「どこに？」僕はしかし其処には、さう言はれてみて、やつと何か白っぽいものを、ちらりと認めたやうな気がしたただけだった。

「いまのが辛夷の花かなあ？」僕はうつけたやうに答へた。

「しやうのない方ねえ。」妻はなんだかすつかり得意さうだった。「いいわ。また、すぐ見つけてあげるわ。」

が、もうその花さいた木々はなかなか見あたらないらしかつた。僕たちがさうやつて窓に顔を一しよにくつつけて眺めてみると、目なかひの、まだ枯れ枯れとした、春あさい山を背景にして、まだ、どこからともなく雪のとばつちりのやうなものがちらちらと舞つてゐるのが見えてゐた。

僕はもう観念して、しばらくちつと目をあはせてゐた。とうと

うこの目で見られなかつた。雪国の春にまつさきに咲くといふその辛夷の花が、いま、どこぞの山の端にくつきりと立つてゐる姿を、ただ、心のうちに浮べてみてゐた。そのまつしろい花からは、いましがたの雪が解けながら、その花の雫のやうにぼたぼたと落ちてゐるにちがひなかつた。……

# 青空文庫情報

底本：「花の名随筆」 三月の花」作品社

1999（平成11）年2月10日初版第1刷発行

底本の親本：「堀辰雄全集 第三卷」筑摩書房

1977（昭和52）年11月

入力：岡村和彦

校正：noriko saito

2011年1月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 辛夷の花

堀辰雄

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>